

【中学校の部】 優秀賞

太鼓の響きをつなぐ

白杵市立南中学校 3年
吉田 悠花



夕暮れ時の広場に、小気味よく響き渡る太鼓の音。一ドンドンカッカッカドドン。その音に誘われ、地域の人たちが集まってくる。

これは、私が住んでいる地区で毎年行われている盆踊りの光景だ。私の父は、十五年前から太鼓を叩いている。毎年盆踊りの時期になると、「俺が叩けるのもいつまでできるか分からない。後継者を育てて、この先もずっと盆踊りを残していきたい。」と、私達家族に語っていた。

二年生になったばかりの、昨年四月。その父から「盆踊りの太鼓を叩いてみないか。」と声をかけられた。私は小さい頃から楽器を演奏することが好きだった。家には電子ピアノがあり、暇さえあれば弾いていた。散歩の途中で近所の神社を訪ね、そこにある太鼓を叩くこともあった。そんな様子を見ていたので、父は私に声をかけたのだ。

私は「叩いてみたい」と思った。しかし、だんだんと不安になった。これまで太鼓を叩いていたのは全員男性だ。そのため、力強い音だった。ただでさえ人見知りの私が、男性の輪にたった一人で入れるわけがない。あんなふうに力強く叩くこともできないだろう。そんな気持ちがどんどん大きくなり、父の誘いを断ろうと思ったとき、今年とは別の女性も参加するという話を聞いた。「一人ではないのなら」と私は挑戦することにした。

六月、練習が始まった。同じ地区に住んでいるとはいえ、ほとんど話したことがない方ばかりの中での練習は、とても緊張した。それでも、笑顔で「よろしく。」と声をかけられ、話に聞いていた女性も参加していたので、緊張はほぐれていった。実際に叩いてみると、想像以上のきつさに驚いた。歌や踊りが合わせやすい速さで叩くこと、場が盛り上がるように力強く叩くこと、次の叩き手と交代するためにタイミングよく移動すること。ただ叩くのではなく、いろいろなことを考えなければならなかった。また、一度止まると、どのタイミングで叩けばよいのか分からなくなってしまふ。毎年のように聞いていた太鼓の音色に、こんな苦勞が隠されているなんて、思いもよらなかった。練習のたびに、手の指や手首、腕、肩…体中が痛くなった。

しかし、不思議と「もうやめたい」という思いは一つもなかった。それは、地域の方や父が優しく教えてくれたからだ。速さが分かりやすいように手拍子をしてくれたり、「うまくなりよる。」と励ましてくれたりした。

そんな優しい方々だが、太鼓を叩くときはいつも真剣だった。地区のみんなが盛り上がるように。亡くなった人たちにみんなの思いが届くように。そんな思いがひしひしと伝わってきた。私もそんな思いを太鼓の音にこめなければと、自然と練習にも身が入った。

そして本番当日。浴衣に下駄という慣れない服装に、気持ちが引き締まった。地区の人が一人、二人と増えていく。それにつれて、私の緊張も高まっていった。何人かが叩いてとうとう私の番になった。かなり緊張して、叩く速さがいつもよりずっと速くなっていったと思う。そんな私を落ち着かせようと、父と一緒に練習してきた人が、いつものように手拍子をしてくれた。私はそのリズムに合わせて太鼓を叩き、少しずつ調子を取り戻していった。盆踊りが終わると、地区の方が「上手やな。」「よかったよ。」と口々に声をかけてくれた。その言葉に体中の痛みが消えていくようだった。そして、「来年もまた叩きたい」と決意した。

しかし、今年には新型コロナウイルスの影響で、盆踊りは中止となった。練習さえできなかった。曾祖母の初盆だったので、天国まで届くように力いっぱい叩きたかったが、その思いをかなえられず悔しかった。

地区の人や、父が守ってきた盆踊り。今年は中止になったが、来年、再来年はきっとできるはずだ。たくさん人がつないできた太鼓の音色を、今度は私がつないでいきたい。